

没後100年 近代フランス “サン=サーンス” 第1回
音楽の父

プログラム

今年フランスの生んだ大作曲家サン=サーンスの没後100年の記念の年に当たります。そこで2回に分けて“近代フランス音楽の父”とも言われるサン=サーンスを特集します。

カミーユ・サン=サーンスは1835年10月9日、フランスのパリで生まれました。生後間もなく父親は亡くなり、母親と大叔母に育てられ、音楽教育も二人から受けました。特に大叔母のシャルロット・マソンは優れたピアニストで、二歳の頃からピアノの手ほどきを行うと、すぐに神童ぶりを示し、5歳で作曲を始めました。7歳からピアノをスタマティ、和声法をピエール・マルダンに学び、10歳の時最初の公開演奏会でモーツァルトのピアノ協奏曲を弾き、天才的技術を披露しました。13歳の1848年にパリ音学院に入学、作曲をルベールとアレヴィ、オルガンをブノアに師事、グノーからも助言を得ています。16歳で作曲した「聖セシルへの賛歌」は協会から賞を受けその年の12月に初演。すぐにサント・マリー協会のオルガニストになると、1858年にはパリの最高位であるマドレーヌ教会のオルガニストになりました。1861年ニデルマイェール音楽学校のピアノ教授を引き受けますが、生徒のなかにはフォーレもいました。1864年に初めてのオペラを書き、68年には最も名高い「サムソンとデリラ」に着手するなどオペラに関心を向けますが、一方で1871年、フランスにおける器楽音楽の発展をめざして「国民音楽協会」を設立。メンバーにはフランク、ラロ、フォーレ、ギローなどが加わりました。フランスではその当時、新しい交響楽運動が起こりつつあり、サン=サーンスもこの時期から急速に管弦楽曲や室内楽曲の作曲に力を入れ始め、創作の最盛期を築いていくのです。(第2回に続く) (中川)

カミーユ・サン=サーンス (1835~1921):

交響詩“死の舞踏” op.40

ジャン・フルネ指揮東京都交響楽団

(1987.9.24、25 国立音楽大学講堂 DENON CD盤)

テンマークとロシアの歌による奇想曲 op.79

エリック・ル・サージュ(ピアノ)/エマニュエル・パユ(フルート)

フランソワ・ルルー(オーボエ)/ポール・メイエ(クラリネット)

(2002.3.17 東京オペラシティ・コンサートホールでのLive)

ピアノ協奏曲第2番ト短調 op.22

イエフム・ブロンフマン(ピアノ)

クルト・サンデルリンク指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1992.6.7 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

序奏とロンド・カプリチオーソ op.28

アンネ・ゾフィー・ムター(ヴァイオリン)

サイモン・ラトル指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(2015.12.31 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

歌劇“サムソンとデリラ”

第2幕“あなたの声にも心も開く”から第2幕フィナーレまで

プラシド・ドミンゴ(テノール=サムソン)/オリガ・ボロディナ(メゾ・ソプラノ=デリラ)

ガリー・ペルティエニ指揮ミラノ・スカラ座管弦楽団/ミラノ・スカラ座合唱団

(2002.2.17 ミラノ・アルチンボルディ劇場でのLive)

交響曲第3番ハ短調 op.78 “オルガン付き”

ジョルジュ・プレートル指揮ウィーン交響楽団/ マリー・クレール・アラン(オルガン)

(1990.3.24 ウィーン・コンツェルトハウス大ホールでのLive)

曲目解説

交響詩「死の舞踏」ト短調作品40

サン=サーンスの4曲ある交響詩の3番目に当たり、1872年に歌曲として作曲されましたが、1874年に交響詩としてまとめられました。スコアの冒頭に引用されたアンリ・カザリスの奇怪な詩の内容に沿って曲は展開して行きます。巧みな描写的管弦楽法が見事な名曲です。

「ハロウインの夜、夜半の教会の鐘が鳴り終わると死の神が現われ、ヴァイオリンを弾き、墓石をたたいて合図する。すると大勢の骸骨たちはあちこちの墓場の影から踊り出て奇々怪々な踊りを始め、骨と骨が触れあう不気味な響きが伝わる。踊りが高潮した時、怒りの日をもじったワルツの旋律が流れ、一番鶏が鳴くと骸骨の踊りはぱったりと止まり、そそくさと墓場の中に逃げて行く。」

デンマークとロシアの歌による奇想曲作品79

優れたピアニストでもあったサン=サーンスが1887年、ロシアに招かれた時に作曲された作品で、編成が風変りなのは、その時のメンバーがフルート、オーボエ、クラリネット、ピアノだったためです。ロシアの他デンマークの旋律が引用されていますが、これはこの曲を献呈したロシアの皇后マリア・フョードロヴナがデンマークの王女だったことに由来しています。それぞれの楽器の魅力を引き出し、室内楽作品でも多くの優れた作品を残したサン=サーンスの佳曲のひとつです。

ピアノ協奏曲第2番ト短調作品22

ピアニストとしても巨匠と呼ばれるほどの名手だったサン=サーンスはピアノ作品も数多く残していますが、5曲の協奏曲のうち、第2番、第4番、第5番は広く知られています。第2番は1868年、33歳のときに、ロシアの作曲家で大ピアニストであったアントン・ルビンシュテインからその年に予定されていた演奏会にピアニストとして出演を求められたサン=サーンスが、その日のために17日間で一気に書き上げたという作品で、ヴィルトゥオーソ的な華麗さと、フランス風の洗練された美しさを持つ初期を代表する名作です。

第1楽章 アンダンテ・ソステヌート 第2楽章 アレグロ・スケルツァンド 第3楽章 プレスト

序奏とロンド・カプリチオーソ短調作品28

サン=サーンスはパリ音学院の後輩でもあり、当時の天才的名ヴァイオリニスト、サラサーテのためにヴァイオリン協奏曲第1番と第3番を作曲しました。この「序奏とロンド・カプリチオーソ」は当初、第1番のフィナーレとして着想されましたが、結局1863年、現在のように独立した作品としてまとめられました。この曲もサラサーテに献呈され、1864年4月4日にサラサーテの独奏、サン=サーンスの指揮で初演されています。メランコリックな美しい憂愁をたたえた序奏に始まり、リズムカルで旋律豊かなロンド主題と3つの副主題が絡み合っって華麗な音楽を繰り広げていきます。ヴァイオリンの華やかな技巧と音楽性が見事に結晶した傑作です。

歌劇「サムソンとデリラ」第2幕

サン=サーンスは生涯13曲のオペラを作曲しましたが、今日では頻繁に上演される唯一の作品が「サムソンとデリラ」です。1868年に着手し、1874年に完成。「イスラエル民族が異教徒ペリシテ人から迫害を受けていたとき、サムソンという勇士が現われ、敵地に乗り込んでペリシテ人を怖がらせませんが、妖婦デリラの色香にだまされ、自分の怪力の秘密を漏らしてしまいます。眠っている間に両眼をくり抜かれ、怪力を失ったサムソンは、ダゴン神の祭礼日に神の犠牲として差し出されようとしませんが、民衆のために奇跡を願って力を取り戻し、敵衆とともに自らも果てて行く」という様が壮大に描かれます。第2幕の「あなたの声に心も開く」はデリラがサムソンの秘密をなんとか吐かせようと誘惑する場面で歌われる名曲で、サムソンの叫び声を交えながら第2幕のフィナーレへと続いていきます。

交響曲第3番ハ短調作品78「オルガン付き」

1868年、ロンドン・フィルハーモニー協会の委嘱で作曲された作品で、1868年5月19日自身の指揮で初演されました。この作品の完成後、サン=サーンスを高く評価し、自身大きな影響を受けたリストへの献呈を申し出ますが、半年後にリストが逝去。楽譜に「リストの思い出に」という献題をつけて出版されました。曲は2楽章構成ですが、それぞれ2つの部分に分かれているため、4楽章構成とみることも出来ます。大きな特徴はオルガンが使用されている事ですが、これは優れたオルガニストでもあったサン=サーンスが、大聖堂で奏でられる教会音楽を想定したのではないかと思われる。オルガンにピアノも加わり、循環形式による統一感も見事。優美で壮麗、近代管弦楽法の粋を集めた傑作です。

第1楽章 第1部 アダージョーアレグローモデラートー第2部 ポコ・アダージョ

第2楽章 第1部 アレグロ・モデラートープレストー第2部 マエストーソーアレグロ